

## 昭和に生きた文豪

岩井翔希



皆さんは、京都外国語大学付属図書館には一体何冊の本が蔵書されていると思いますか。実は、五十八万冊を超える本が図書館にあるのです。これだけ多くの本が蔵書されていると、自分の読みたい本を探しただけでも一苦労ですね。そこで是非とも利用したい機能が、付属図書館ホームページからアクセスできる主題別書誌データベースです。このデータベースは、カテゴリ分けされた項目ごとに本をまとめて検索できるという優れた機能を持っています。或る分野に関して概括的に調べ物がしたい時には非常に役立ちます。

さて、今回はこの場をお借りして、日本文学データベースに登録されている三島由紀夫をご紹介します。

三島由紀夫は本名を平岡公威と言いまして、名家の出です。祖父の平岡定太郎、父の平岡梓そして息子の三島と三代続いて東京大学法学部を卒業しています。三島の小説における繊細な論理構築は、先祖より授かった天賦の才から生まれてきたものではないかと私は考えています。そして、三島は幼少期より辞書を引くのではなく、読んで勉強していました。ですから、小説の中には溢れんばかりの美しい日本語が登場します。

では、これから三島の作品を紹介させていただきます。本当は、全作品を紹介したいところですが、紙面の都合上私の気に入った三作品に絞ってご紹介します。まず一つ目は『潮騒』です。この作品は三島の小説では珍しく、異質性が一切省かれた王道的な男女の恋の行方を描いた作品です。文体が非常に平易であって三島作品入門者にお勧めです。続いては『美徳のよ

めき』を紹介しします。この作品は男女の不倫を描いたもので、内容が非常に混沌としているのが特徴です。感情の発露の描写が非常に巧妙で、読者ものめり込むこと間違いなしです。最後は皆さんお馴染みの『金閣寺』です。この作品の素晴らしい所は、何といたって論理性のレトリックでしょう。特に柏木という人物が不具について哲学的に口述する場面は何度読んでも感心させられます。その他にも三島節とも言える高度なレトリックがいたる所に散りばめられています。正に三島文学史上至極の一冊です。

昭和の年号と満年齢を同じくする三島由紀夫は正に昭和に生きた文豪と言うに相応しい人物です。その三島が残した言葉にこのような言葉があります。少々長いですが引用します。

「われわれは戦後の日本が、経済的反映にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失い、本を正さずして末に走り、その場しのぎと偽善に陥り、自らの魂の空白状態へ落ち込んでゆくのを見た。」

もちろん、私たちは外国語大学の学生ですから外国語学習に一層の注力をせねばなりません。しかし、母国の言語体系や文化、精神への理解なくしてはその学習も空虚なものになってしまうでしょう。三島が残した言葉を噛みしめて、私達も考えて勉強しなければならないということですね。

皆さんも三島作品に興味をお持ちになったら、是非データベースからアクセスして作品を調べてみてください。

いわい しょうき（日本語学科2年次生）

